【二次創作】七式探偵七重家綱・番外編

暇 隣人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【二次創作】七式探偵七重家綱・番外編

【Ｎコード】
Ｎ０６０９Ｓ

【作者名】
暇　隣人

【あらすじ】
友人のシクルさん（ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／２１７３５／）の作品である「七式探偵七重家綱」（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７６９８ｏ／）の二次創作小説を書かせていただきました。なお、許可等はきちんといただいております。原作が好きだという方、原作をまだ読んでないという方も、ぜひお楽しみいただけると幸いですー。

ＦＩＬＥ．ｅｔｃ「慈島紗綺　上」（前書き）

・本小説は、前述した小説の『ＦＩＬＥ２０　「和登岩十郎　下」』までのネタを含んでいます。
まだ読まれていない方、これから読むつもりの方にはネタバレになりますので、そちらを先にどうぞ。
原作を知らなくてもある程度は楽しめるかと思いますが、余裕がある方はぜひ原作から。

・原作に書かれている設定をある程度まとめている部分があるにはありますが、
あくまで文章を整えるための一要素にすぎません。
もっと細かい設定を知りたい方は、原作をよーくお読みください。

・ミステリ成分がちょこっと強いです。ちょこっとだけね。
推理したいと思われる方がいましたらぜひどうぞ。解けても賞品はありません。↑

・私の勝手な主観と想像で書いている部分があるため、割と原作ブレイカーな可能性が高いです。
原作のキャラ設定等を大事にしたい方にはあまり閲覧をおすすめしませんです。特に纏さんとか。

・私の小説の面白さは保証できません。ただ原作の面白さは保証します。割とマジで。

前置きはこんな感じです。長たらしくて申し訳ない。
それでは！　どうぞお楽しみくださいませっ！

← ← ←

FILE．etc「慈島紗綺　上」

由緒ある家。まさしくその一言に尽きる。

「うわぁ……」

ボクの目の前に広がる視界のほとんどは、高く巨大な大豪邸の輝きで埋まっていた。

たしかに、あの子がお金持ちだってことは聞いてたけど――まさか、こんなにすごいなんて。

「あらあら……。これは、随分と大変そうね？　由乃ちゃん」

ボクの隣に立っている巫女装束の女性は、ほんの少し疲れの混じった声色でそう言った。長くて黒い艶やかな髪を揺らして、ボクの顔を微笑みながら見つめてくる。

……がんばってね、とでも言いたいのか。

「一応言っとくけど、纏（まとい）さんも探すんだからね？」

「わ、わかってるわよ。わざわざ現実を見せないでくれるかしら」

ぷはぁー。

深い深いため息の後、纏さんは小声でこう言った。

「――依頼が終わったら、褒美にあの娘をいただくとしましょう」

それはやめろっ！

ボク――和登由乃(わとゆの)が助手として働いている七重探偵事務所(ななえたんていじむしょ)。罷波(ひなみち)町(ょう)にあるこの建物は、ここ最近はいつも以上に閑散としていた。

……言いかえると、もう三日間依頼がまったくないってことだよ！

家計ヤバイ。

「ゆーのー……昼飯はぁ？」

デスクに突っ伏しながらもごもごと話しかけてきたのは、この事務所の探偵、七重家綱(ななえいえつな)だ。ソフト帽にスーツ姿といういかにも探偵らしい見た目ではあるけど、言葉も振る舞いもとにかく適当なので、実際はただのだらしない奴にしか見えない、っていうか実際だらしない。まあ、二十歳前半っていう年齢から考えたら、ある意味妥当な姿なのかも。

時計を見ると、すでに時刻は一時を回ろうとしていた。さすがにそろそろご飯にしてもいいかな。

「よし、じゃあ作ろっか。なにがいい？」

「国産和牛のステーキ」

「安いやつで」

「燻製肉」

「時間かかりすぎ」

「満漢全席」

「仮に作ったとして全部食える自信あるのかっ！？」

なんかむちゃくちゃな注文ばっかされてるんですけど！

気のせい？　気のせいかなぁ……？

「じゃあカロリーメイト」気のせいじゃなかった。

「だぁかぁらぁ！　作るっつってんだろ！」

「作れよ」

「んなもん作れるかーい！　スーパーで買ってこい！」

「オーダーメイドとカロリーメイトって似てるよな」

「うんたしかにそうだね……じゃなくてっ！　作らないし作れない

から！」
「なんだよじゃあ何が作れんだよお前……」
「メニューの幅が狭いわ！　もっとあるでしょ簡単なの！」
「簡単なの……うまい棒？」
「いい加減市販物から離れろー！」
――ピンポーン。
ボクらの不毛な言い争いをさえぎるように、チャイムが鳴り響いた。
「ほらもー、こんな無駄なことしてるからお客さん来ちゃったじゃんか……。ご飯は仕事の後でね？」
「いいじゃんもう客とか放っと」「はーい！　今いきまーす！」
家綱がとんでもないことを言いそうになる前に、ボクは玄関まで走ってドアを開けた。
「あっ……」
ドアの向こうに立っていたのは、ボクと同い年ぐらいの女の子だった。
どこかで見たことがあるような制服を着ていて、顔立ちは中性的といった感じだ。髪型も、どちらかといえば男子寄りな短さで（ボクほど短くはないけれど）、赤いチェック柄のミニスカートがなければ男女どっちでも通りそうな出で立ちだった。
「こんにちは。依頼かな？」
微笑みかけながらそう言うと、その子はなんとなく恥ずかしそうに顔を伏せた。
「は、はい……あのっ、探偵さんは？」
「あー、探偵さんは今ちょっと……」死にかけてます。「出かけてるよ」
「そ、そう、ですか。それじゃあ、また今度っ」
「あっ――待って！」
家綱がいないとわかった瞬間（実際はいるけど）、すぐに駆け出していきそうになった彼女の背中を大声で呼び止める。ぎこちない

動作ながらも、ゆっくりとボクに振り向いてくれた。お嬢様のような、可憐な動作だ。
「もしよかったら、話だけでもボクが聞いとくよ。どんな依頼？」
「あ、えっと……」
もじもじもじもじ。……うーん、相当な恥ずかしがり屋さんなんだろうなぁ。
しばらく沈黙をはさんだ後、その子は静かに話し始めた。
「――指輪を、探してほしいんです」
「指輪？」
「はい……」
――その依頼は、とても簡単でとても複雑な、久しぶりの仕事だった。

依頼者の女の子――慈島紗綺（いつくしま さき）さんの家系は、有名でこそないものの、なかなかの財力をもった実業家家系であるらしい。ボクもうっすらとではあるけど、名前だけは聞いたことがある気がする。
目の前にある大豪邸は紗綺さんの祖父にあたる人が建てたものだそうだ。ところどころ壁紙が剥がれたりはしているけど、まだまだ十分に人が住めるレベルの建物だと思う。決して派手な見た目ではなく、シンプルなつくりがボク的にはなかなかの好印象だった。
……さて、今からこの家の中でとある探しものをしないといけないんだけど。
「どっから探そうか、纏さん？」
「じゃあ私はまず玄関あたりから」
「……勝手に帰らないでね」

「うぐっ」
いかにも「バレたか」って顔すんな。
「もー、真面目にやってよ纏さぁん……。久しぶりの高収入の仕事なんだから、張り切ってやんないと！」
そう、この依頼の報酬金はとてつもなく高いのである。成功すれば、おそらく来月までは食いつないでいけそうなぐらいの額だ。家綱ならもちろんのこと、ボクだって易々と見逃そうとは思わない。
「……そんなこと分かってるわよ。でもねぇ、いざ目にするとやる気失くしちゃうじゃない？」
たしかに、纏さんの意見も一理ある。
なにしろ奥行きがどこまであるか分からないぐらい広大な建物の中で、ほんの小さな探し物を見つけないといけないっていうんだから、嫌に思うのも当然といえば当然な話だった。無理やり意気込んではみるものの、心の奥の方ではこれからの苦労にため息をつきたくなる自分がいるのが分かる。
「はぁ……なんで指輪なんて探さなきゃならないのかしら？　お爺様のお歳も相当なものなのでしょう？　もっと思い出深いものが他にあるんじゃなくって？」
「それはたしかにそうかも……」
ま、あくまでそういう依頼だから、なんとかして見つける以外することはないんだけど。

紗綺さんのおじいさんにあたる慈島紗吾郎（いつくしま さごろう）さんは今年で八十歳になるらしい。なんでも、実業家としての仕事をやめてからはずっと奥さん（紗綺さんのおばあさんだ）と二人だけで暮らしていて――その奥さんが半年前に亡くなって以来、この家で本格的な隠居ぐらしをはじめたのだとか。
そうして、孫にあたる紗綺さんとその弟さん（名前は教えてもら

えなかった）と一緒に三人で暮らしていた最中――突然、長年続いていた持病が悪化してしまい、つい最近病院に入院した。
そこで紗綺さんは、なんとかおじいさんに元気を出してもらおうと、おじいさんが若いころに奥さんあてに買った結婚指輪を渡してあげようと考えたのである。
……で、ここからがボクらの仕事。
なんと、その問題の指輪がどこにも見つからないというのだ。
「まあ、これだけ広ければ無理もないと思うけれど。弟さんもまだ小さいのでしょう？　たった一人だけで探すなんてなったら……諦めたくなるのも頷けるわね」
たしかにそうだ。二人いるボクらでさえ諦めたくなるぐらいだし。
困った紗綺さんは、地元でそこそこ名が通るようになってきた家綱のところに依頼をして――こうしてボクらが、学校で忙しい紗綺さんに代わって探すことになったわけだ。
「そういえば、なんで家綱じゃなくて纏さんが来たの？」
「あら、私じゃあご不満だったかしら……？」
ニヤァ、と妖美な笑み。うぐっ……！　綺麗だけど、綺麗だけどつられないっ！
「そ、そういうんじゃなくて！　純粋に理由を知りたかっただけだから！」
「照れなくてもいいのよ由乃ちゃん？　ふふ……まあ、ただ単に『そういう気配』を感じたからよ。亡くなったお婆様の忘れ形見……まさしく霊の香りがしてくると思わない？」
――あぁ、なるほど……。
纏さんは、その巫女装束の見た目に違わない能力を持っている。いわゆる霊能力者（自称）で、今までにも何度か霊がらみの依頼を解決してきたなかなかの実力者だ。
たしかに、亡くなった人の物となればなんらかの霊感がはたらくのかもしれない。体格的には決して力仕事向きじゃないけど、そういう意味では連れてきて正解だったのかも。

「さ、無駄話もなんでしょうし、早く探しましょう」
……なんとなーく、纏さんがうきうきしてるように見える。
「あのさ、纏さん」
「どうしたの？　不安？　抱きしめてほしい？」ちげぇよ。
「もしかして、『なんか宝探しみたいで楽しそう！』とか思ってない？」
「……」微笑すんな。
固まったまま何も言わなくなった纏さんを横目に、ボクはただため息をつくしかなかった。
「はぁ……どうなるのかなぁ、これ……」
先の見えない依頼ほど、疲れるものはないからねー。

――そういえば、纏さんのことについてちゃんと説明しておいた方がいいのかな？

纏さんは、簡潔に言えば事務所にいた探偵、七重家綱の『人格』の一つだ。……さあどんどんわけがわからなくなってきた気がする。
つまり家綱は、『多重人格者』なのである。いわゆる超能力と呼ばれるものの一つで、家綱の場合は「どの人格をどのタイミングで出すか」というのが容易に操れるらしい。親人格、とでもいうのだろうか。大変便利な能力で、家綱が探偵を難なくやれているのもある意味この能力のおかげなのかもしれない。
纏さんの他にも、葛葉さん、アントン、晴義、ロザリー、そしてもう一人……といった様々な人格がある。あ、それぞれの人格の内面についてはあえて触れないでおくことにしとこう。……考えれば

考えるほど、欠点しか出てこない気がしてきた。

まあ、そんなすごい能力とはいえど、やはり難しいところも多々あるようだ。

家綱の場合、人格だけじゃなくて見た目まで完全に変わってしまうのだけど、服装までは変わらないので別人格に入れ替わった際は変装しているような格好になってしまう。一応この難点を克服するために、事前に服装を設定しておいて好きなときに変えられるという「クロスチェンジャー」という機械も持ってるけど、牛乳とかをこぼすと上手いこと動かなくなるから注意が必要だったりする。……あー、前例？　あったよ。

それから、やっぱり人格によっても大きな違いがある。例えばいかにも西洋風なお嬢様人格のロザリーに交代した場合、そのプライドの高さからなかなか家綱が表に出にくくなってしまうこともあったりする。たいていの場合、別の人格から家綱に代わるときには少しだけ時間がかかってしまうらしい。まあ、これについてはしょうがないことだと思う。一口に人格といっても、それぞれがれっきとした『個人』なわけだし。

また、それぞれの人格の記憶もちゃんと繋がってはいない。別の人格の時に見たことや聞いたこと、感じたこと……そういったものを完全に共有することは出来ない。家綱いわく「夢を見ているような感覚」らしく、そのあたりはボクがちゃんとフォローを入れる必要がある。

――どうして家綱がこういう能力を持つようになったのか、ボクは決してすべてを知っているわけじゃない。ある一件のときに、家綱からちゃんと説明してくれたことはある。でもやっぱり……心のどこかでは、信じられないという気持ちがあった。

でも、ボクはそれでいいと思ってる。
ボクにだって話したくない過去はあるし――何より、どんな過去があったって、家綱は家綱だ。
だらしなくて適当で、いつもいつもバカみたいなことばっかりしてる奴ではあるけれど。
ボクの大切な『家族』の一人には、違いないから。

紗綺さんから事前にもらっていた鍵を使って家の中へと入る。中は思ったとおり派手ではなく、木造のような見た目と相まってなんとなく和風のイメージを放っていた。もちろん家には誰もいないため、とても静かな空気だ。
――ん、いや。たしか弟さんがいるんだっけ？
『弟は小学校に行っていないんです。……ちょっと、事情がありまして』
話を聞いたとき、紗綺さんが悲しげに言っていた言葉が頭に浮かぶ。事情については詳しく話してはくれなかったし、ボクも特に追求する気はなかった。
ということは、今この家にはボクと纏さん、そしてその弟さんしかいないってことになるんだけど。
「……防犯意識、ないなぁ」
家綱のことが世間的にそこそこ有名になってきたとはいえ、これはさすがに油断しすぎだと言わざるをえない。もちろんボクと纏さんは何かを盗もうとか壊そうだなんてことは考えちゃいないけど、やっぱり部外者に違いはないのだ。
ただでさえこんな家なんだから、そういうところはちゃんとしとかないと危ないよなぁ。

……そういや今更だけど、ご両親はどうしてるのかな。
次に紗綺さんと話すときに聞いてみよう。とにかく今は、指輪を探さないと。

纏さんと手分けして、とにかく片っ端から部屋を回ることにした。一階は纏さん、二階はボクの担当だ。この家が二階建て程度の建物で本当に助かった。三階まであったら纏さんじゃなくてもっと屈強なアントンぐらい呼んでた。……まー奥行きは素晴らしいぐらいに広いけどね！　ボク帰りたい！
二階の階段を上がると、長い長い廊下の両側にたくさんの扉が……おおっと現実見たくない。目をふさいで手探りで前に進み、最初の部屋の前に辿り着く。すーはーすーはー。深呼吸をしっかりしてから、ドアノブに手をかけて……開くっ！
「……わー……」
二十畳は、あるね？
一般的なレベルの家具しかない部屋ながら、その広さには目を疑った。いやむしろ、家具が少ない分その広さが逆に際立つというか……とにかく広い。
「……まあ、探す場所はだいたい決まってるからいいんだけどね」
床に指輪が落ちてるかどうかなんてすぐにわかるから、問題は何もないんだけど……でもなぁ、モチベーション的にこれは……うぅむ。
「あーもう！　うじうじしてたら仕事終わんない！　はじめるよ、しっかりしろボクっ！」
まずは部屋の奥にあるタンスから……ってこれ、なんで二つも置いてあるのさぁ……？

……無理ゲー。
一部屋探すのに、丸二時間もかかるとか。
「あーもー、こんなんじゃいつまでたっても終わんないよぉ……」
隅々まで探しても、見つかるのは質素なおもちゃの類と、ところどころがほつれにほつれたぬいぐるみばかり。指輪どころか使えそうな日用品の一つさえ見当たらない。当たり前のことかもしれないけど、二階の部屋は最近はあまり使ってないのだろう。空っぽになった引き出しの山に、積もりに積もった玩具と人形とほこりの煙たさ……もういろいろと嫌気がさすけど、指輪がある可能性を考えたら探さないわけにもいかないし。
いつまでかかるのかなぁ、この依頼……。纏さんが上手く見つけてくれてるといいな。そんなに期待はしてない。
思わずため息が出る。部屋を見渡すと、床の一部だけが不自然に綺麗になっているのがふと目についた。床が抜けでもしたんだろうか。弟さんがいるって言ってたから、たぶんその子がやったんだろうな。やんちゃでいいことだと思うよ。
ボクにもそんな時期があったのかなぁ……おっと、こんなこと考えるのは後だ、後。
まあでも、今は現実逃避でもしたい気分だ。そんな気だるい気持ちのまま、この依頼にかかりそうな日数をちまちまと指折り数えていると――
「おにーちゃん、だれ？」

――後ろから、突然声をかけられた。
「――ッ！？」
驚いて振り向くと、開いたドアの向こう側に男の子が立っているのが見えた。
もしかして……弟さん、かな？
「ねーねー、おにいちゃんだれ？」
一瞬わけがわからなかったけど、すぐに理解した。――この子、ボクのことを男だと思ってるのか。
意識して男らしい格好をしてるとはいえ、こうして男として認識されるのはなかなか珍しいことだったので、ほんのちょっぴり嬉しくなった。……ってあ、いや、ボクはもちろん女だけどね？
「えーと……君は？」
「ぼく？　ぼくはね、えへへ……コータっていうんだよ。おにいちゃんは？」
なんだか嬉しそうに、コータ君はボクに話しかけてくる。……普通、驚くもんじゃないのかなぁ。一応紗綺さんから聞かされてるんだろうか。
「ボクは由乃。えと、紗綺さんからいろいろ聞いてるのかな？　よろしくね」
「え？　サキおにーちゃん？　サキおにーちゃんは、なんにもいわなかったよ」
――ん？
サキ、『おにーちゃん』……？
たぶん聞き間違いだろうか。いやでも……たしかにそう聞こえた気が。
「ユノおにーちゃん、なんかさがしてるの？」
「あ、ああ、うん。指輪を探してるんだけど……コータ君はどこにあるか知ってる？」
混乱を押し留めて、とりあえず聞いてみる。知らないだろうとは

思うけど、念のためだ。

――結果として、それは尚更困惑を招いてしまったんだけど。

「それって――おばあちゃんがもってたゆびわのこと？　それならいま、『ユノおにーちゃん』が持ってるよ！」

「――は？」

固まったボクをあざ笑うみたいに、大きな笑い声を残して走り去っていくコータ君。完全に呆気にとられて、ボクはその背中を見守ることしかできなかった。

……え？　ボク？

……うっそだぁ。

複雑に絡まりはじめた、虚偽の糸と見えない真実。

また変な依頼を受けちゃったなぁ……と、ボクは一人で苦笑するのだった。

ＦＩＬＥ．ｅｔｃ「慈島紗綺　中」

「――ち、ちょっとっ……！　纏さんっ！？」
「うん……？　どうしたの？　由乃ちゃん」
「ど、どうしたのじゃなくてっ……！　一体なにを……ひゃうっ！」
「決まってるじゃない。確かめてるのよ、いろいろとね」
「ま、纏さ……あうっ！　そ、そこは……だめぇっ……うぅ……」
「恥ずかしがらなくていいのよ……。すべて私に任せていればいいの。ほら、もっと力を抜いて……？」
「あっ……まっ、纏さっ……やめっ……！」

「――あら、やっぱりどこにも指輪なかったわね」
「だから最初からそう言ってるだろうがぁあああああああああっ！！」
いい加減にしろっ、この変態巫女ぉっ！

……どうもみなさんこんにちは。とっても大事なものを失ってしまった気がする由乃です。見ないで。独りにしてあげて。
「なによぉ、そんなに怒らなくたっていいじゃない……。私は由乃ちゃんの言ったことを言葉通りにとっただけよ？」
「最後まで聞いてないでしょ！　『もちろんボクは持ってないんだ

けど……』ってちゃんと言ったじゃんか！　ここ一番大事！　逆説表現には気をつけましょうって国語の授業で習いませんでしたかねぇ！？」
「あらあら、由乃ちゃんったら勉強熱心なのね？」
「ごまかすなっ！」
とまあ、こんな具合に。
ボクと纏さんは、コータ君の謎の発言に見事振り回されていたのだった。

あれから纏さんと合流し、一階を中心に探し回ってみたがこれといっていい手がかりは見つからなかった。纏さんいわく霊感のようなものもあまり感じないらしく、このままいくと今までと同じありきたりな探し物の依頼になりそうだった。
探し物の依頼は、だいたい二、三日もあれば終わる。まぁ紗綺さんの場合は家がこの広さだから、あと二日ぐらい余計にかかるかもしれないけど。
その他計算しても、かかるのは最高で一週間程度だろう。早めの解決が期待できそうだ。
『そう……ですか。わざわざご報告、ありがとうございます』
電話の向こうで、紗綺さんが息を吐く音がする。それが焦燥なのか安堵なのか、なぜだかどっちにも聞こえてしまった。
夜、ボクはその日のだいたいの進行具合を紗綺さんに電話で話していた。特に紗綺さんから頼まれたわけでもないけど、おじいさんの容態のことも考えると多少は話しておいた方が安心するかもしれないと思ったからだ。
……ただ、コータ君のことだけは喋らないことにした。無駄な心

配をかけると紗綺さんも心配するだろうし。
もちろん、いろいろと引っかかってはいるけど……たぶんただの悪ふざけにしか過ぎないような気がする。
そのついでというのも何だけど、紗綺さんのご両親のことについても聞いてみることにした。
『父と母のこと……ですか？』
「うん。ほら、紗綺さんからいろいろ話は聞いたけど、結局一回も出てこなかったからさ。どうしてるのかなーって思って」
『……』
……ありゃ、なんか気まずい沈黙が。
「あ、えっと……い、言いたくないなら言わなくてもいいよ！　ちょっと気になっただけだからさ……！　あはははは……」
『――死にました』
ズン、と。
重いなにかが、体全体に被さってきた。
『事故でした。最期を看取っていただいた医師さんが言うには、即死だったと』
「そ……そっ、か……それは、その……残念だったね」
いきなりすぎて、ちゃんとした言葉すら返せない。
それでも紗綺さんは、電話口の向こうで静かに笑ってみせた。
『いいんです。もうずっと昔のことだし……こういうこと、慣れましたから』
声は乾いていたけれど、その元気はおそらく本物だ。辛い出来事を乗り越えた後の――冷たいけど、たしかな元気。
『私と弟――コータっていうんですけど――は、小さいころから親戚中の家を転々と回ってきました。うちは父方も母方もお金持ちな人が多くて……そういう境遇だったから、あんまり不自由とかはありませんでした』
「……」
『でも、その……すごく、物足りなかったんです。贅沢なことなの

かもしれないですけど、本当にそうでした。いろんな人から愛されて、期待されて、励まされて……嬉しくなかったと言えば嘘になるけど、でも――心のどこかが、ぽっかり空いてる、っていうか……』

ところどころ詰まりながらも、紗綺さんは自分の想いを精一杯話してくれた。

『だから――祖父だけは、あの人だけは助けたいんです。ほんの短い間しか一緒にいられなかったけど、祖父が私とコータにくれたものはすごく暖かくて、心がじんわりとするようなものばかりで……特にコータには、私とは比べ物にならないぐらいの愛情を注いでくれて……でも私、まだあの人に恩返しが出来てないんです』

精一杯の愛情を注いでくれた、唯一の人。

そんな大切な人に対する紗綺さんの想いは――きっと、他のなにを犠牲にしてでも、無くしちゃいけないものなんだろう。

紗綺さんの言葉は、力強い信念をもってボクの鼓膜にぶつかってくる。

『もう祖父の命は長くありません。このまま何もしなかったら、きっと後悔してしまうと思うんです。コータもきっと、同じ気持ちを持ってる。感謝するなら、それを伝えないといけない。胸の中に留めたままじゃ何の意味もない。だから――伝えたい。私たちの言葉で、私たちの行動で、私たちの想いを伝えたい。今やらないと駄目なんです、もう間に合わなくなっちゃうんです、私たちの想いを伝えるのは今しかないんです、だから――』

「――紗綺さんっ！」

『あっ……あ、すっ、すいません……』

さっきまでの声とはうって変わって、気弱な紗綺さんの呟きが聞こえてきた。ちょっぴり恥ずかしそうで、でも誇らしげな雰囲気が電話の向こうから伝わってくる。

――これはもう、頑張らなくちゃいけないや。

紗綺さんの信念に応えられるように、ボクはボクなりの誠意を見せなきゃいけない。

絶対に、指輪を見つけてやるんだ。
『あの……じつは、あさってお見舞いに行くんです。弟と二人で』
「えっ、あさって？」
突然の知らせに、正直戸惑いを隠せなかった。
「それって……やっぱり、おじいさんのでしょ？」
『はい。ですから、その……無理は承知なんですが、出来るならそれまでに見つけていただけませんか？　大変なことなのはわかっています。でも……もしかしたら、これが最後になるかもしれないから』
「……」
さっきまでの考えでいけば、一週間以内に見つけられれば妥当……ぐらいのレベルだったけど。
――出来る。ボクと纏さんなら、やれる。
とにかく自分を奮い立たせる。そうでもしないとやってられない。
時間は待ってくれないんだ。ボクらの方が、速く走らなきゃ。

「――わかった。絶対に見つけてみせるよ、指輪」
『……ありがとうございます、由乃さん』
紗綺さんの微笑みが見えた気がした。ボクも元気に、笑ってみせた。

運命の日は、明日だ。
揺るがないように決意を固めて、ボクは眠りについた。

「ねーねー、おねーちゃんって名前なんていうのー？」
「……纏よ。ま・と・い。もういいでしょ？　早くどっか行きなさい、ほらほら」
「えーやだー。マトイおねーちゃんと遊びたーい。ねーあそぼーよー」
「遊んでる時間なんてないのよこっちは！　あぁまったくもう！　これだから小さい男の子は苦手なのよ！　由乃ちゃん、なんとかして頂戴！」
……あえて『女の子』を外したところに、纏さんのすべてが見えるよ。
紗綺さんとコータ君のお見舞いが明日に迫った今、ボクらには暇なんてほんの一欠片も残されていない。とにかく手を懸命に動かして、小さな指輪が見つかるまで根気よく作業を続けなくちゃいけない。コータ君には悪いかもしれないけど、こっちだって相当急いでいるのだ。
それにもかかわらず……コータ君は度重なるわがままでボクと纏さんを困らせてきていた。ぞんざいには出来ないけど、はっきり言ってしまえば邪魔に他ならない。
最近の小学生って、こんなに節度がないもんなのかなぁ……あぁもう、こんなことになるなら紗綺さんにちゃんと言っておくんだった。
「ねーねー、マトイおねーちゃーん！　あーそーぼー！」
「うるさいっ！　こらっ、帯をひっぱらないの！　外れちゃうでしょうが！」
「くるくる回るやつやってよー」
「回らないわよ！　あんまりしつこいとあんたの首回すわよ！」
「お代官さまー」
「くるしゅうっ！　大変くるしゅうござるぞ越後屋！　だからさっ

さと立ち退けっ！」
「纏さん、ちょっと言葉が……」
「あぁ！？　なによっ！？」
「……なんでもないです」
こんなに必死になる纏さんは初めて見た気がする。……指輪探すより疲れてない？
ふと、自分の腕につけた腕時計を見る。うわっ、もう午後じゃん。一応、ボクと纏さんの決死の努力のおかげか、もうすぐで一階が全部探し終わるけど……二階は一階と違って、小さな部屋が多いからなぁ……急がなきゃ。
「ほら、コータ君？　邪魔しちゃダメだよ、後でボクが一緒に遊んであげるから」
「えー、ユノおにーちゃんと遊ぶのー？」
「不満なのかよ」じゃあ終わったら迷わず帰るよ。
「べっつにー、ユノおにーちゃんでもいーけどー、うーん」
子供らしいそわそわとした動きだ。……あ、コータ君と話しながらでもちゃんと手は動いてます。
本棚、机、タンス（一体いくつあるんだ）、ベッドの下、畳の裏、物置……しかも、今ボクらが探している途中の台所に至っては、家電製品の数々から水際のあらゆる隙間まで丁寧に見たものの、指輪は見つかるどころか気配すらまったく現さないままだった。なんだか、笑われているような気がして落ち着かない。焦りは見落としを生むけど、焦りでもしないとどうしようもない状況なのも事実だった。
――ここまで探しても、見つからないなんて。
やっぱり二階にあるのだろうか。でも……なんというか、あまり考えられない。
そもそも、おじいさんが普段利用していたのはほとんど一階のはずだ。おじいさんがどれぐらい病気にかかっていたのかは詳しく知らないけど、八十歳になるほどの人が軽々しく二階を利用していた

というのは非常に考えづらいからだ。となれば、二階はほとんど紗綺さんとコータ君専用の場所だということになる。
そんな場所に、一体どうして指輪があるっていうんだろう？
それしか可能性がないとはいえ、どうしても違和感が――

――ちょっと、待てよ。

『あの家は、半年前に祖父が建てたものです。――ちょうど祖母がなくなってから、少したった頃で』

紗綺さんの話を、脳で反芻する。
何かを、忘れている。ボクは何かを――間違えてる？

『……あ、はい。一緒に住んでいますよ。私と祖父と……あともう一人、弟との三人暮らしです』

わだかまりが消えない。わかっているのに、埋もれている。
認識と記憶の境で、正解は止まったままだ。

『ああ、いえ……弟は小学校に行っていないんです。……ちょっと、事情がありまして』

事情。学校に行けない、事情。
それがもし――なにかの病気だったとしたなら。

――え？　サキおにーちゃん？　サキおにーちゃんは、なんにもいわなかったよ。
――それならいま、『ユノおにーちゃん』が持ってるよ！

そうだ。
ずっとずっと感じていた、あの違和感の正体。

ボクが「おにーちゃん」で、
紗綺さんも「おにーちゃん」で、
纏さんは「おねーちゃん」で、
指輪を持っているのが「ユノおにーちゃん」である理由が、
つまり――それだとするなら？

タンスに押し込まれたおもちゃ。ほつれたぬいぐるみ。一部だけ、綺麗になった床。
――二階の階段を上がると、長い長い廊下の両側にたくさんの扉が……。
三人暮らしだ。そう、三人しかいないんだ。なのに……。

「――コータ君」
ボクは問いかける。コータ君は、不思議そうな表情でボクの顔を見てくる。
「なぁに？　ユノおにーちゃん」
天使のような微笑み。それは意図の仮面か、それとも修正の表皮か。
正体を暴くときが、来た。

「君は、昔からずっとコータ君だった？」

止まる空気。
纏さんは、一体何事かとボクの方を見てくる。ボクはそれに構わず、コータ君の顔だけを見つづけた。
――笑顔が、冷たい。
感じていた違和感は、少しずつほぐれていく。

「もしかして、君は――『君じゃない誰か』になってた時期があったんじゃない？」

それは例えば、現実逃避のための逃げ場所。

「ぬいぐるみで遊ばなくなったのは最近？　二階の部屋は、ほとんど君の部屋なんだろ？　どれだけ壊した？　床も破ったでしょ？　違うかな？」

それは例えば、暴走を止めるための道具。

「ああ、それと――コータ君はさ、『何かを逆に見たり』してない？　そう、たとえて言うなら『性別』、とか――」

それは例えば、誠意ある治療の末の、唯一の後遺症。

「――『ボクとキミ』、とか」

「……」
静寂。
電波のような静けさに、鼓膜は痛みを覚える。
――さて、ちゃんと答えを聞こうか。
あいにく、時間もそんなに残されてないから――

「指輪を持ってるのは、コータ君だろ？」

「あはははははははははははははははははははははははははっ」

――心臓が、一瞬だけ止まった。

壊れた機械のように、乾いた笑い声を出し続ける姿は――明らかに、さっきまでのコータ君じゃなかった。

そしてその壊れた何かは、そのまま台所を飛び出してどこかへと走っていった！

「――！　ま、待てっ！」

「ち、ちょっとっ、由乃ちゃん！？」

小さな背中をすぐに追いかける。後ろから纏さんの声が聞こえるけど、今はとにかく捕まえるのが先決――！

「あははっ！　あはははははははっ！」

長い廊下を駆けるコータ君の足は、意外にもすばしっこい。止まらない笑い声を発しながら、玄関へと一直線に向かっていく。

――急げ、急げッ！

このままじゃ、すぐに逃げられてしまうっ！

「ただいま――って、えっ？」

突如開いた玄関の向こうに立っていたのは、制服姿の紗綺さんだった。

「！　さっ、紗綺さんっ！　捕まえてっ！」

ボクの大声に対して、紗綺さんはまだぽかんとしたままだ。その間にも、コータ君はどんどん走り続けていた。

距離は縮まっていく。あと少しで、ぶつかる――
「コータ君だっ！　コータ君が、指輪を持ってるっ！」
はっとした紗綺さんは、コータ君の体を受け止めるようにして――

「はぁっ、はぁっ……！」
玄関の外に倒れた二人は、無事だった。

「やっとだ……っはぁっ……やっと、捕まえたよ……！　コータ君っ！」
ボクの声を聞いたコータ君は、ゆっくりとボクに振り向く。
その顔はもう、笑っていない。

「――ふん。ユノおにーちゃんなんて、嫌いだ」

FILE．etc「慈島紗綺　下」

事務所のドアが開いた。読んでいた本から顔を上げると、ボロボロな姿の家綱がそこに立っていた。
「おかえりー。どうだった？　猫見つかった？」
家綱が受けてきた依頼は、「いなくなった飼い猫を探す」というものだ。いつも通りの、大してお金にもならない至極簡単な依頼の一つ。そんな小さな依頼でも、とにかく受けて解決しないことにはお金も入ってこないから、文句を言わずに受けるしかないのである。
「あぁ……見つかった。最悪だ」
「なんで最悪なの？」
「猫がどこにいたと思う？　屋根の上だぞ屋根の上！　いつまでたっても降りてこねぇし、あげくの果てには『あなた、ちょっとあそこまで行ってマトンちゃんを捕まえてきて頂戴！』とか言い出しやがってあのクソ飼い主がっ！　それでわざわざ屋根の上までのぼったら、いつの間にか猫はどっかに行ってるわ、俺は屋根から転げ落ちるわで災難だらけだ！　息も絶え絶えに飼い主のとこ戻ったら『ああ、ありがとう。それより聞いてくれる？　マトンちゃんったら私のことを見つけた瞬間にすごいスピードで降りてきてくれたのよ！　やっぱり愛情の込め方が違うのね、私とマトンちゃんは切れない糸で結ばれているんだわっ』とか言い出しやがるし……あぁもう！　人を屋根の上に上らせといて大した労いの言葉もなしかっ！　しかもなぁにがマトンだ、羊の肉かっつーの！　ＤＱＮネームにもほどがあるわっ！」

家に帰ったとたん、誰にともなく大声で愚痴を浴びせ続ける家綱。
……不憫な話だなぁと思いながら、ボクは読みかけの本のページをめくるのだった。
「おい由乃っ！」
「いてっ」
頭を叩かれた。
「ちょっ、何すんだよっ！？」
「何すんだよっじゃねーよ！　こうなったのもお前のせいだぞ！」
「はぁ？　なんでさ！？」
「お前がこないだの依頼の報酬を受け取らなかったからだっ！　何してくれてんだアホ！　あれだけあればこんなクソったれな依頼せずに済んだのに……！」
……あー。
そういえば、そんなこともありましたねー。
嘘。もちろんちゃんと覚えてるけど、あんまり話題には出したくない。
「あれはー……仕方なかったんだよ、ちょっと」
「なぁにが仕方ないだ！　ちゃんと指輪は見つけたんだろうが！報酬ぐらい受け取るのが筋ってもんだろ！？　違うか！？」
「それはたしかにそうだよ。でもそんな簡単じゃなかったんだ、あれ」
「……そういや、あの依頼についての話、まったく聞いてねーよな……俺」
ソファーにどっかりと座って、背伸びをしてからボクのデスクの方を睨んでくる。
「教えてもらおうじゃねーか。一体どんな事情があったのかをな」

「――弟は……コータは、精神病にかかっていました」
短い髪の毛を掻きあげながら、紗綺さんは暗い表情でそう言った。
紗綺さんの家のリビングは、予想に違わずずいぶんと質素なつくりだ。二人かけ程度のソファーが二つあり、大きめのテレビと一緒に三角の形に配置されている。中心には透明なガラスのテーブルが、大した意味もなく置かれていた。
そのうち、今紗綺さんが一人で座っている方のソファーには、ところどころ破けたりほつれたりした跡が鮮明についている。
――考えるまでもなく、コータ君のつけた傷だろう。
「父と母が死んだのは、コータがうんと小さい頃のことです。まだ物心もついてなくて……もちろん、私も今よりずっと小さかった」
不慮の事故。即死だったと、紗綺さんは言っていた。
「交通事故でした。私とコータも、両親と同じ車に乗っていたんです」
「ということは……紗綺さんとコータ君、二人だけが助かったってことかしら？」
「はい。そうなります」
纏さんの問いに、紗綺さんは真剣そのものの表情で答える。
……大好きだった両親は死んで、自分たちだけが取り残されてしまった感覚。
まだ幼い紗綺さんの肩にのしかかってきた悲しみの量は、きっとはかり知れないほどのものだったはずだ。
「それが原因で、私とコータは親戚の方の家を回ることになりました。――コータの病気が発症しだしたのも、その事故のせいです」
精神病――話にはよく聞くけれど、こうして詳しいことを聞くのは初めてのことだった。
「コータ自身は、まだそのことを完全にはわかっていないんですが

……幻覚が見えたりだとか、幻聴が聞こえたりだとか、別の人格が出てきたりだとか……そういった症状がよく表れるそうなんです。その症状が出るたびに、身近にあるものを壊したり破いたりして……親戚中を転々としていたのも、そういう理由があったからです。誰も、進んで私とコータの面倒を見たいとは思っていなかったんですよ。……当たり前のことかも、しれないですけど」

半ば押し付けられるかのように、知らない人の家に住まわされて、追い出されて……ずっとその繰り返しが行われていたのかと思うと、それだけで胸が痛くなる気がした。

目を伏せながら、紗綺さんは話を続ける。

「そんなとき――私とコータを引き取ると言ってくれたのが、祖父でした」

祖父の紗吾郎さんは、ちょうどその頃奥さんを亡くしていた。二人を引き取ろうとした理由が、ただ単にその寂しさを紛らわせたかったのか、それとも本気で二人を育てようと思ったのかは、残念ながら教えてくれなかったという。

「さすがの祖父も、初めはコータの病気に対して随分驚いていました。時にはものすごく怒ることもあって……でも、祖父は祖父なりにいろいろと考えがあったみたいで。その一つが、この家のつくりです」

三人暮らしの家には相応しくない、二階にあるたくさんの部屋。

やっぱりあれは、コータ君のために作られたものだったらしい。

「これは後で聞いた話なんですけど、祖父は初めから、コータの病気を治そうと考えてこの家を建てたらしいんです。自分に残された財産を惜しみなく使って、コータのために、コータのために……って」

紗吾郎さんにとって、コータ君は大切な孫だ。たとえどんな病気を持っていたとしても、その事実は絶対に変わることはない。

かけがえのない『宝物』、なんだ。コータ君も紗綺さんも。

「たぶん、由乃さんも見ましたよね。二階にあるたくさんのおもち

や」
「ああ、うん。ぬいぐるみとか、他にもたくさん。あれも全部おじいさんが？」
「そうです。ここに移り住んですぐの頃は、毎日のようにコータと祖父はあれで一緒に遊んでいました。祖父は病気のことは何一つ知りませんでしたが、とにかく心をこめて接してあげようと考えてたんだと思います。今までとは違ってすごく良い環境だったから、一ヶ月もしないうちにコータの病気はどんどんよくなっていきました」
ただ、精神病が絶対に完治することはないですけど――と、紗綺さんは暗めに付け足した。
「由乃さんがコータに何を言ったのかは知りませんが、あの時のコータはたぶん、病気が再発してたんだと思います。一時的なものに過ぎないとは思いますが」
「……ごめん。正直、すごく反省してる……」
「いえ、いいんです。元はといえば、指輪を勝手にとっていたコータが悪いんですし。それに――ほんの少しでも、遊んでくれてありがとうございました」
「遊び？　いや、私たちは何もしてないわよ？」
纏さんが純粋に疑問に思ったように聞き返すと、紗綺さんは頭を横に振った。
「お話、してくれたんでしょう？　あの子すっごく怖がりですから、いつもは全然外に出ようとしないんです。他人とお喋りするのも苦手で……それがまさか、コータの方から話しかけてきただなんて……正直驚きました、ふふっ」
初めて見た紗綺さんの笑顔は、心からの嬉しさで満ちているように見えた。
――綺麗な子だなぁ。紗綺さん……。
見た目はそんなに女の子らしくなくても、内側から出てくるその可憐さだけは隠しようがない。
「だから私、すごく感謝してるんです。指輪もちゃんと見つけてい

ただいたし……本当にありがとうございました」
深々と頭を下げる紗綺さんを前に、ボクと纏さんは顔を見合わせる。
「もしよければ、またお願いできますか？　なにがあるかはわかりませんが、もし何かがあれば……」
顔を見合わせていたボクらは、ふっと笑い――紗綺さんに対して、笑顔を向ける。
最後の決め言葉だ。ボクは息を整えて、その言葉を口にする。

「――うん。いつでもどうぞ。どんな依頼でも、ボクらはずっと待ってるよ」

「――まあ、こんなところかな？」
ソファーに体を預けながら、俺はそれとなく由乃の話を聞いていた。由乃の話す内容はなんとも不思議なもので、簡単に信じられるようなものではなかった。
「面倒な話だな、そりゃあ……そういや、その爺さんはどうなったんだ？」
「あの後、予定通りお見舞いに行ったらしいよ。紗綺さんがいうには、結構元気にしてたんだってさ。指輪のおかげなのか、それとも

たまたまなのかはわかんないけど。でも……すごく嬉しそうだったとは言ってた」
「……そうか。よかった」
その知らせを聞けただけでも、まあこの仕事を受けた甲斐はあったのかもしれない。デスクに座る由乃も、ほんの少しだが笑みを浮かべている。
――だが、まだ問題はある。
「……それで、だ。報酬はなんで受け取らなかったんだ？」
それだけの事情があったとはいえ、やっぱり仕事は仕事だ。ちゃんと解決したんだから、もらわないのは筋違いじゃないか？
俺がそう聞くと、由乃はちょっとだけ意地の悪い表情をして、口元をゆるませながら俺の顔をにらんできた。
「……一応言っとくけどね、家綱。断ったのはボクじゃないよ」
「は？　ってことは――纏か？」
どうしてあいつが、わざわざ報酬を断ったりするんだろうか。特に金に執着があるわけでもないのはたしかだが、だからといって断るなんて……よっぽどな事情でもあったのか？
「交換条件だよ。お金の代わりに、いつでも紗綺さん家に行ける権利」
「はぁっ？　なんだそりゃ！　別にいつだって行けんだろ、近所なんだから！」
「違う。まだ先があるんだってば。正確には――『いつでもコータ君をなでなで出来る権利』、かな」
「……？　おいおい、それってどういう……」
たしかに、纏にレズの気があることは知っている。しかし、まさかそっちの趣味まで開拓しはじめたっつーのか……？
「いやいや、そういうわけじゃないんだけどね……ははは」
適当にごまかす由乃の顔には、なんとも微妙な笑みが浮かんでいた。
「すごく複雑な事情だから、そこは伏せておくよ。探偵なんだから、

たまには自分で推理してみたら？」
「俺は頭脳労働が苦手なんだよ……ああもう」
もたれかかっていたソファーから体を起こし、大きく背伸びをしながら壁にかかった時計を見る。うお、もう昼過ぎてんじゃねーか。
「わかった、もういい。報酬は諦める……。それより由乃、飯作ってくれよ。いいかげんコンビニの弁当は飽きた」
「はいはい、わかったわかった。なに作る？」
「ウイダーインゼリーで」
「沈めるぞ」
冗談だ、と一言いって、結局メニューは由乃に任せることにした。なんだかんだいって、由乃の作る飯はそこそこ美味いから気に入っている。今日もどんな飯が出てくるのか、地味に楽しみではあった。

――完成を待っている間、俺はさっきの由乃の話を改めて思いかえしてみる。
あまりにタイミングのいい……というか、出来すぎたシナリオとでもいうか。
「……似たもの同士、か」

――『ねーねー、マトイおねーちゃーん！　あーそーぼー！』

コータという子供が、纏という人間を積極的に慕った理由。
『多重人格』。コータははっきりと、その共通点を感じたのだろう。

――『ああ、それと――コータ君はさ、『何かを逆に見たり』してない？　そう、たとえて言うなら『性別』、とか――』

女の由乃は、「おにーちゃん」。
女の紗綺も、「おにーちゃん」。
だが、女であるはずの纏が、「おにーちゃん」ではなく「おねーちゃん」と呼ばれていたのは――つまり、そういう理由があったからだということなのか？
「コータっつーガキが見てたのは――”纏”じゃなくて、”俺”だったってことか」
コータは見抜いていた。纏という『殻』の中に、俺という『主人格』が隠れていたことを。
男の俺は、コータにとって「おねーちゃん」になる。だから結果として、纏は「おねーちゃん」と呼ばれていたわけだ。

そして、もう一つ。

――『ボクとキミ』、とか。

由乃とコータが交わした会話を、改めて思い浮かべる。

――「ねーねー、おにいちゃんだれ？」
――「えーと……君は？」
――「ぼく？　ぼくはね、えへへ……コータっていうんだよ。おにいちゃんは？」
――「ボクは由乃。えと、紗綺さんからいろいろ聞いてるのかな？　よろしくね」

コータは、由乃に「指輪を持っているのは誰？」と聞かれたとき、「ユノおにーちゃん」と答えた。
実際に指輪を持っていたのはコータ自身。だが、コータは『ボクとキミ』を逆に見る。
指輪を持っている”コータ”という名前の『ボク』は、目の前にいる”由乃”という名前の『キミ』にすり替わってしまった。だから、コータはそう答えたのだ。

「……じゃあ、名前を聞いたときは？」

由乃に名前を聞かれたとき、コータは由乃の名前を知らなかった。もし知っていたとすれば、『ボクとキミ』は逆になり――コータは自分の名前を「ユノ」だと言ったはず。
しかし、コータは由乃の名前を知らなかった。だから「コータ」と答えたわけだ。だが――

「それだと、つまり――『キミ』の方が〝コータ〟だっつーことになるわけだ」

じゃあ、『ボク』は一体、誰？

「……はぁ。まったく、わけがわからんなぁ」

――

『――もしもし。由乃さんですか？』

「あ、紗綺さん？　こんばんわ。どうしたの？」

『いえ、今日祖父のお見舞いに行ってきたものですから、いろいろお話しようと思って』

「そっか……おじいさん、どうだった？」

『ええ、すごく元気そうでした。……でも、指輪を渡したら、「これはコータに渡しなさい」って』

「……？　どうして、コータ君に？」

『実をいうと――入院する少し前に、祖父はコータ君に指輪をあげていたそうなんです』

「えっ、てことは……」

『はい……無くなったと思っていたのは私の勘違いだったんです。祖母が死んでから、あれはずっと祖父が肌身離さず持っていたらしくて……自分はもう長くないと思ったのかもしれません。コータに渡して、この先の時代まで引き継いでもらおうとしたんでしょう』

「なるほど……じゃあ僕らは無駄足だったってことだね……」

『あっ、そ、そういうわけじゃないです！　ほら、あの、纏さんだってうちに来てくれるようになったわけですし……！』

「ああ、それはそっか。多少は力になれたみたいだね、よかった」

『はい……』

「――それとさ。一つだけ、ちゃんと聞いておきたいことがあるんだ」

『……コータのこと、ですか？』

「うん、そう。詳しく説明はされてないから、こんがらがっちゃって」

『……わかりました。可能な限りで、お話します』

「ありがと。じゃあ、まず――あの子の本当の名前は？」

『慈島紗百合（さゆり）。生粋の女の子です』

「コータ君っていうのは、病気の影響でできた『別の人格』？」

『はい。由乃さんも知ってると思いますけど、あの子は『ボクとキミ』――つまり、『自分と相手』を逆に見ます。あの子にとって、『キミ』は常に”コータ”のことなんです』

「なるほど……だからあの子は、自分のことをコータって言うし、一人称も『ぼく』なわけか……」

『ええ……。病気はある程度治りましたが、その癖だけはどうしても抜けなくて……仕方なく、私と祖父が話を合わせることにしたん

です。だから、誰かに説明するときはあくまで『弟』と呼んでいるだけのことです』

「なるほどね。うん、わかったよ。どうもありがとう、紗綺さん」

『はい。――あの、由乃さん？』

「うん？」

『今まで何も言ってませんでしたけど……由乃さん、私のこと覚えてませんか？』

「えっ？」

『覚えてないならいいんですけど……ほら、野々乃木高校の』

「ののぎ……？　――！　み、宮瓦の事件のときの！」

『そうです、宮瓦君の！　あのとき、私も同じクラスにいたんですけど……覚えてません？』

「ああ、うん……すっかり忘れてたよ」

『あのときの由乃さん、すごくかわいかったです……』

「やめてぇっ！」

『あ、ご、ごめんなさいっ。でもほんとかわいかったですよ？』

「今のボクには、あんまりほめ言葉にならない、かなぁ……？」

『あはは、そうかもですね……それで、相談があるんですけども』

「相談？　なに？」

『実は私――「ロザリーファンクラブ」なるものを学校で作っちゃいまして』

「ぶっ！」

『一目見たときから、あの人の華麗な佇まいに惚れてしまったといいますか……とにかく、すごく気にいっちゃって……』

「あ、ああ、うん……そっか」

『それで、もしよければなんですけど――ロザリーさんを、もう一度野々乃木高校に連れ戻してほしいんです！』

「無理！」

『はやっ！？』

「うん無理だから！　じゃあねまた逢う日までっ！」

『ち、ちょっと、由乃さんっ！？　お願いします、ロザリーさんを――』

「おやすみなさいっ！」

ガチャンッ。

……あ、はい、どうも。

今日も今日とて、ボクは元気です。

あとがき

みなさんどうも。作者の暇（いとま）　隣人（りんじん）です。

「七式探偵七重家綱・番外編」、楽しんでいただけたでしょうか？

……非常にわかりにくかったですね、すいません。↑

隣人としてもどうしてこんな複雑な内容になってしまったのか想像もつきゃしませんｏｒｚ

まあなんにせよ、無事に完結させることが出来てよかったと感じてます。……あ、自己満足というわけではないですよ？　たぶん……（おい

＊＊＊

今回、この「七式探偵七重家綱」という作品（以下、「家綱」）の二次創作をしようと思ったのには、大きく二つの理由が。

まず一つ目に、『「家綱」面白すぎる！』という純粋な想いがあったからです。

「家綱」の設定や物語のつくりが上手で個性的なのはもちろんの

こと、何より自分が「すごい！」と思うのは『勢いのよさ』です。
二次創作を読んでもらった方にはわかるかもしれませんが、隣人の文章には恐ろしいほど勢いがありません。つまるところ、ある意味一種のないものねだり、とでもいうのでしょうか……とりあえず、自分の書けない文章を書ける人という存在はとても貴重で、尊敬するべきものだったりします。
そういう意味で、隣人自身が純粋に「家綱」を、そして作者であるシクルさんをリスペクトしたいという気持ちがあったため、こうしてご本人の許可を経て公開させていただいた次第です。

次に、『二次創作に挑戦したかった』という理由があります。
自分は今まで、何かの二次創作を書いたことはほとんどありません。
というのも、自分の文体は大変特徴的、というか……言ってしまえばただの力不足ということになってしまうのですが、細かな描写や具体的な設定をせず、ただ漠然とした世界観の中でキャラクターを泳がせる、というような文体なのです（あくまで自分から見た感想として）。
このような文体で書いていることもあり、すでに確立してしまった既存の設定に合わせるという方法はなかなか難しい方法だったというわけです。そういった理由で、私はあまり二次創作というものを書こうという気がありませんでした。
前述したとおり、二次創作は私には不向きな作風です。――しかし、「それならあえてこの機会に挑戦してみたらどうだろう？」というちょっとした欲望が生まれてしまいまして……そこにちょうどよく、「家綱」という作品が目にとまったというわけです。

もちろん、ただの偶然だけというわけでもありません。自分以外にも「家綱」の二次創作をしている方の存在（イマジンカイザーさん）も一種の起爆剤となりましたし、何より「家綱」の個性的なキャラを自分で動かしてみたいと考えていたことも一つの後押しとなりました（結果として、ちゃんと動かせているかどうかは疑問ですが）。

＊＊＊

以上、この二つの理由があって、こうして二次創作をさせていただいたというわけです。どうでもいい余談で、なおかつ大変拙い文章でしたが、この作品を楽しんでいただけたのなら幸いですっ。

この場を借りて、原作者のシクルさんに改めて感謝と敬愛を。これからも「家綱」の執筆がんばってください。適度に期待して待ってます！

というわけで、ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございますー。

またいつか会う日まで。ではでは！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0609s/

【二次創作】七式探偵七重家綱・番外編

2011年10月8日13時53分発行